絵本　三十八

E 23
48

東京大学総合図書館

東京帝國大學圖書印

東京大学総合図書館

夏はちすさかりに入道の姫宮は御ち
仏ともあらはし給ふくやうせさせ給ふ源氏は
かねて此宮の四季御ゆかしく経かき給ふの
くさ〳〵二品そへられけるをせ給ひてとぞそ
はしまさせ給ふよ成ける此二品あまたなつかしう
こゝぬかしこゝの御かしこさ成て心あてせ給へり
むらさき紀の上は御そせさせ給ひさう花つく
ゑの御かいきのはなのあそひなるなつかしう
きよらなるおひなつかしう御ゆかしきた人
なをなき中二品なりけれは二しかなきを
000583948 5

よおりてはゝかりなそてらしつのこゝろに花
みまいらせ候ぬなすりておとの桜の花ならり
たくひもしくしき花のさかりにてみてなき
わりなやうかうまいらする百年思ひくらされ
さつりかさねはゝけりもし花かたちもとめて
白さんのこくはゝりなりなかこ酒りそりう
はらて青ありかのちいまいりのきさやうて
ちいさくてわれ身あらき萱のちらとれ
らみつゝかえりのおりれあそさうそうやう
くらみちをかりけりのあらくた身なりなり

ゆくりなりてめくりあひあひく侍となりて
身やうらふあらみれとさやうのたよりうせて
嶋なてゆつりのいちこやうにゆんそそけ
うかりせなけの宝をなありこの在みなら
えんまそくこにみちさ身なりなむ色き
色はくもんもんはくらせなりさていかゝく
きやうかりみゝいとろて朝夕みゆそおし
ありも侍りとてもむ屋の人を絶へなりに
おかせ年なくのこゝふきらりにとを在なり
まこみ毒のはかひよめきやうへらそてゝいうきて

殿はつゝひありてもしましませ人給ふへくとて
尾張(?)の海よひ給ふけりおちたるこのちゝをも
ともはつらうみゆ思てりかやくあらなとしし
侍とうむかへのりの守護にて国をしけこれ
さらはかのきよ思ひさくかりにゟいこゝより
ちんのく思そくみはくをまとひて御所の(?)
しちゝたいのゝ国そりかゝのまたはつゝたく
のりまてゝそうしにゝのあり給たくの
人まゐりつゝひとつ大院にしのほさに本のふ
とて宮のおりしまに殿のはらのしまたみさき

給ふまてせまれ給ひとらにゝみりれはさてつゝひて
所せくかれ者とりのまそておもてしくしくゝてさて
きゝらか女たちゝ五六十人斗つゝとひさりきてく
みな思ひしとりこまてわつらへなとゝ思さりふ
りょうてゝのまゝしそ者を給まそまさき
はゝせはゝらゝのを給ゝとゝてりたくいゝはゝの
名わりうとあるの国にみゝをうけを様み見
稚らりも宮に女房ちまくちこそかいあされ
まゝかりかしせゝの御りいたゝみなりとあるゝ
みそし共かりて大のるにきてもゝ国を[illegible]

東京大学総合図書館

ちゝ御座ておもてうり大事あるへきとも人
のけもひきうそてよりて大夫なとまいり物
やうらあらハ人々とよろこひ給ひ御宮も
人けよをさまし給ひて候とていたりとゝ
けれとて見まし申してまつる君らんしてあり
と思召しなれて御座ましてまつる給へ御き
見れらうおもしろくちとて女とかへり給ひて
あまたに人とハまし給ふ御心ありて宮ゐる物の
思ひり給へ大夫さきのちをきて去るせま
にと給ひ見れ御給ひて物給へまつる

の侍と御ぞみえつゝしに八人の物とも罷
よりのり申しけり読の世ての五条の
花の中にも申しりお思ひて物くとわしけせ
とて打ちゑみ給ひぬ
さてもさまつおもしろくて契りをきて
扇のあるて申しておりて大夫とまとりけり
のちのしてさうらうなりの御ゐるにも大夫つ
申給へり
思ひてありてちらす物宮の御契りて御なつ
御やちへとらんとて大夫給へまいらせひ

よくておほしくたすかとうらみひあける
剣と物おほし多の此宗し大まり御乃に
あさらかなりとも、ことわきて海いり給へのりさ
くらい秘くらい見んとて給へかくすから
此ありさ法会ぶにて而を作まて見ん中七を此
あつかうなしも人々大うらき此年ニても三み会
の上一世を揚給へ行やりうきひまて守きの
あひちまて見し法人々各世りまへうかるを
ことて全りやむ時りしう出度あかゝ年に
みかうして此侍とあるこゝの縁村よとて出世
なり

すくまし給つゝ行りきゝとひをまし給ておあま
世をまたゆきし大以蓮法花経にむまひ
おふたうこて山寺之海をあらうてたゝいま
の世り行つてをまし中け大き給り地へ
ともらく此つて音うら給ひたまきけまじ三み年
人会あられ給ひ花にて寿ひてくいよ様んをたり
のありちのにおほしたりまきまて内みて山乃
みうしも大あらしちてみ寄見ひとゆう
清よき仲の此世をとも給と而を紀母大なり
あむ年山ありうる院に海うてさ世給ひける

年ころはくと思ひしかと世の中つねならす
女御をまいらせて后の宮にそなへまいらせ
たまふ事もおほく百人の女御をかゝへて
給ふ中にも千手(？)の女御をみな人もて
かしつき給ふ事まことにかきりなし
女御は五衰殿と申て御かたちいとうつくしく
もおはしけれは君の御心さしふかく院の女御
たちもねたみ給ふ事かきりなし然に
みかとも御心さしふかく給はりてそく
みてはれかつ給ふ事明暮におはしまし
けるに女御すこしも御心をかけさせ給はす

ひめ宮をまいらせて后にさたかなるへき事
ましませはとて后の宮は此事をねたみ
うらみ給ひて世をうらみ給ひける宮の御
後にもさいはひこそとも思はれよの中に
天竺まかた国のみかと善財王と申けるか
五衰殿の女御をみかとの御心ざしにて后
おほせいたさせ給ふそれに付て給はりて
かくて月日をおくり給ふほとに
みかとのさかりなるなかにいつも女御の
御かたちをかきりなくおほしめしけるに

然しらをもせかに小嶋蓋のいうしつ身よ
よろのいもしれ年ことし上下れたくこしいなし
うき色て我いつしひまてうむ侍り身つゝ
まうせかひとろ枕法にれはしとめきまへ
中乃色いえんの身れきも我なるすへく那に
はらをかふ恋ふあられた能なるのい恋い
らひうし、清身あゆりいてしまきうひ身
よしそうのあさしとも清かれて常の人うしいは
清柳まてまりれはりの色はしまりとはる
ろふらく世我はへしは人身根のい恋りて侍ん

那さ世給ひとの内のこさむひもは袖をしくとき
まろひ乃乱とむくしの若身よしとなとく給ふ
御しきすしも那ゝの人とちこても御とま
わまほうるこの人とおはしうあむくしき
こゝてしそてくろまはまりし侍さる給て十
よ人世乃様へろえしらしふそていはしは梅
これ那をり出こしも那に世給く風ましに
もとしのもと枕給夕蓋ありいはの給ひう出
乃あるきて給ふ色にはく年代はる名ほ
わさ勢我をきてかる御しは、御ゆのい恋い

東京大学総合図書館

かゝりし事にふゝそいかなる事ともてこなん
そしもつし事はまた心ひ事にて給はつる人
おほかたうちけるまゝにめくりて給ひしか
問ありいうきをきこえ給ふ事きこゆれはこよ
おとかなちりたゝしひたるを侍りて見ん思ふかなし
乃ひたまておほしらん思ふり給ひめしいそれ
さむ事なれはたゝといまてちは思ひとれきき
めてたくやうにはまとさきこえておとなしう
て人けりまてなりいとまけもとまてたまて
しまゝてとたまはすゑて思ひたまへにかね中給
ふす

十五夜の夕は紀の御かた人は宮おほえてまつ地
より見たる給ひつて猶あるしの給ふ所の事まさ
宮なとも二三人つれてまうとてなりにけれ
のさきの程を将の宮をひ給ふてきてゆうさる
かたりける侍と殿上にそ事あつかひとらむ
り御酒のみて出の事いひたるあさ
はく夕ゆとて神を思ひてやりたしかよ
なみちの大すいをたまふて事よりけよ詠く
きたる車あら中にとをしのみかとの御と
けるやかりきかし　秋の出の歌かいまて

あきゝに桜山しきしとくれなゐとて中宮の
もはらの野邊遊びけるに心さしと為
そうつけるに世の中つゝきつかはさすく
かゝる道者にはたゝしく命のかきりとも歎
むかしめそあつ人のありなんせて人きゝあかく
山をはらの野邊に桜もありすゝきまあそ
いとあはれて、ちりたる山にまさむとりゝかくちて
生ひはたく侍りしかひなきつゝたまかれし
すゝめの為へい
桜わるゝ枕はうしと志りをかゝる野邊

ゝれはむしかゝるとき念ひ過ぎぬるまゝ
いとゝ宿たいてなにはとかくとありけりてつや
ゆえあひのかたなりまいに思ひそ
をなて菊の宿りをもたれ侍る雪すゝ
むしの聲とありせはさすきて聞かく
きこゆるをうらてもつしくひきよせ宮の御
まことしくまたうのちひくいふことに為紙を遣
ありつる月さうし、かくいとふるや、かの禄と取れ
なりてうたものかなとて、世の中を歎しくて
つきてものかくうつりけるゝ行き也

東京大学総合図書館

おもしろく昔おほえていとあはれに思ひけるに
くれなゐしらゝをひとはいへ例の世のうちにも人の
らむとおもしろうして名誉の御宮のはしに
大将の君慈覚上人の御かたのまきなときこえさせたまひ
給ひしにつけてもいとゝ申すとのゝ御ちかひ
まいらせ給ひてまいり給ふに侍らせ給ひてまて
ありさまのあはれにおもひしを此頃つかひたまへり
さすかに東宮にもおはしまし東宮の御後ありけり
侍る事をいとゝさるへき人のうちにまうてて宮
たちへまいりてたまはりけるに此御かきこえさせ給ふ

内の御事へてまつらせ給ひし月の出てにけむを内いつか
と侍りて待たるゝほかりけるに院まへ人へ
まいり給ひてまつるつかさにまうてられ給へり
なまめかしくまいり給ひて御みのこれは御かへし給へ
おほえしの御すゑあらせ給ひて御ゆるし給ひき
ほとゝきす月みむとひゝのひかりにて梅の香は
なかめ行はなやかに出てたるひかりたゝみ月
のしけるはいくとせを過ぎの世のかたまてあるに
思ふことのたえ故権大納言殿の御かく
まつる御れてかへしけむて人

おほやけよりも物のおりふしのあそびには
なせられしこそまつ花ごとに此ことにゆふ
もてなされて此御ひとかたのいとゝ清らに
しゆ式ならん御心をもつて世つくしき身に
なせおはしの陰なるの袂にて神なかしろ河
みなもいてみつからもなくてやきつねにんと
きこしめしの心あるはおほしめしうらさせ給ふの
そひ此程はいちゝきこえけるにて松は
おもはせらるひいきゝ生のきんみそ行しまん
こおもりしの心に明らけ二つよりみちまいる

ほとにまんせい院より世をうけ給り清けの
ゆあそひあそひかてりこまもの涙をのおもしろて
左大弁式部大夫又入てひさかたの人貴けに
まいりしは大将ことは六條院にたつ物を
きこしめしくおりくり
雲林院の曲水の宴はまつ清すさうにて物
まゐらせあ秋乃松風月おもしくらてきこえ
給まいらり紅葉の此程のあそぶ
おもしこいひやうつしまゐらまうり
なまるく事とてあさくなれはいな事まへ

おほしあまりておとゝの世話へつゝたゝけはひ
とて母むつかたゝつゝうちまとひして給はんとす
月の夜はおもしろし雲井まてみておもひやり申こと
この殿つゝきわたりてかはりたる御こしにたて青
上の御おりの涼のおほしつけられけるまゝ候
そりしつゝ月給ひてありてろくいふかふ
人の清東志こゝのまゝにうち御ゆし世の
人のうちわたりて志けのおもひつゝ御ひまは
又おはひめ院の筆なりしあるに東り大将
左衛門の中こそかく給ひて志中すとおもひけるにより

みなさまにかよふ御すゝしみて名月をめてゝ清う
井にてなましゐてうつ杯を東すりくまへく
月筵しきゐてをりまけおかしく重ねたり給
共なりし夜の共人てうちたるてうつしめて宿世
おひさましてあひかしゆまつりて此さ涼なり
うらはりつるみ共将にはこつりせしとたけ
こまはすこしくこみまにんせうまし給ひ文を
人のたゝ人なみのおもひしそてもうひき
うらしきかなへからまり給へりは侍つゝ
おとの共まもしもうつし給へるにおもしとく侍よく

こゝ地なん侍らし奏ゆゐるかりの世代ゐ元と
ゐほしすてゝ吉川の水の心を拾ひ給ふとて那
うすうす此秋の吾こともかうのゝ歴まとみて
なるを惜らおほしろくみところもらさ
くてうるむ事のかりぬ事なき心かくしてとて
今は我そ給ふに三条の院は中宮の御らひ
ゆゝりなうくゐ物かゝりなくさてゝてわが身は
ゝゝ吉川のをりの清き井に忘るゝくさらり
ね御らへ給ふらむあけまてゝあつまひけるもゝ
思ひわむもしりゝ御ゆらりたまへける給ひけるまうて

さはこゝ思ひ給ふつゝけりまにくもかの
五条まてゆきくにつかくしく所まて待りて
あらぬ我より清此人つかくしくまほそて世に在礼
給ひいつ侍りも侍とつ孫の身世の公はう
されかゝうておほしもへまは世ともまゝあつ
往かふて中に屋まくしとひ立ゐるをのこり此
人は此物けりれからむたよりのおもとえれく
色さえて清らしなたりへ奇おほしれてかそ物
せさせ給へなてあやうれのさ浅まきゝてさせ給
上御ありのいとゆゆくおかれのかたの御宰相そ

東京大学総合図書館

ちゝみへの色にて梅かえ侍し年比よりもまさり
つるかされさへのやうにおほし給つゝ侍るおり
猶我にてこれかなりしつらてそ人々みな
王に侍る御世をいとつゝしうは思ひなすしも侍り
わかうさま姿のうらなきさし思てさせて御なか
梅なき人に年もかへらなりし侍る年まいちきこ
思ひさせなましく侍るせさ侍るとおもひて給ふ
けふなるや木ともかへて行あはれつゝの
いけとかさいとのまたつゝ年こさて出せ給と
侍さいきんにまちつゝ年てくらさ申せ給へる

ころひしも侍らんなくさうた紀をといひきこうしも
行て侍とつし世年なき人の行をうたに
ことに思けるはしくもありそへる申と
色多ありつゝ年てすとにきこつゝさうさ
はすく梅ほりしのと侍る御なおらせれ今年旅
こゝ思ひふかかつるしい物りてひくし志かき
そへり思ひてさすら人もこそ侍まくるさて
侍とつきまし思ひけらにおもしとこさて
給ふを梅の白くこそそり給ひ多かりし
と思ひまて御かたやまと永のいそかしう

東京大学総合図書館

かく給ひての春宮のけまでも入道殿にまゐりたま
ひしに御のゐたりけりなどのいそぎなりて
こゝ院ありしかどもかくてはおはしましなむをとの
つりて入道殿のたゞおほむかたくは大殿こそそこに
侍従ぬしも侍とかなしくはべりしかども御あさましう
そしらおほせられまうりてをかしうもよろしからの給
小一条院に御とのゝ御としの春宮にをりさせ給ふは
いかりはてあらむ心ちしてこそ給ひてのぞまれきし人の
御ことの御ありさまのかくあつて御たひらかにて侍る年
なかりはての御とよりも雑てそおもひ

入道殿年に侍りけるかいとおもしろかりければこの院
まてとえゐ年頃まで物のあはれもおもしろく見給ふ人
侍りなんの物こそのみえ侍りてそうなるはさきに
ん入道殿のたかう御手すゑてなさけ侍りてさだめたまひた
かの侍ふ女房は入道中御かたより侍はくて
となりにてなむさもうしつ年した侍りけるなる
そすくつれ殿のたゞ宗にかへさずはおやかにて春宮と
殿下のきさきの君などの頼りはなみのぞかせたまふ
ことゞまりしき年とおもひなかり胡籙のかたへ
顔はいつのみ給ふ侍りてありしかどもの侍り

ちゝ身こそつまのそてたちまちにかはるをもみえさせ給ふ母
給ひしみかとえ清在給ふにも物の悲しくりん
侍しまてさせ給ふもこゝろもとなき御ことにいはむかたなく
中宮たちのまさほり給へし侍りしなりといひしにさ
給へかくの院の宮の一つの年のほとに春宮をせさせ給ひ
しかは道給ひける年待ちける物さはりし身中
と志川のあるほとはいとゝ弟中宮の御腹にて
し侍るほとに二つのつとめてにて待る志
はかなき思ひ給へるもけふらの后宮の弟
年のほとにあまりたまひけれはいとゝおほしては

春宮ときこえし給へるを故宮はしたなく
きさいの宮のおりさせ給ひしよりは所思く
みやをかりし法師の大宮にはあらまほしく
かくてしもあらせ給ひける限りはみかとの道
にはまゐらせ給ふに女御の中宮の
まことにいつきたまひつる人々しき大将
此又此人はあしからぬ事ともありける
しわつらはせ給ふにこれはせ院と志の君こえ
の御后はすくしてある女御にて
給ふ院につきていかにし給ふ

ありたいちんのまゐりてハ御せうそこおほせ給ひけ
れは侍従かさまゐらせ給へかくなんと申させ給へは
おかしく覚えけりあるひは中宮そ申しまして
給ひし侍従かくれてたゝ人のみなれは
すみまゐらせつまゝてはいふよりしも中く
もしよるもさふらひやうにはゝ清何とてもよ
何事もいひてあまたなりけりさふらふ所の宮にて
所の事なとも申りつたへこそはいふこそつゝ
めてたく人のゆきて給ふまゝ事那
なまけはくらくの事なとてたえしいとうく

いとこの世の中をわすれしこれのさふらふ
なりまいりけり

B 7874

東京大学総合図書館

東京大学総合図書館